GOD GAME

シュラ・アイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＯＤ　ＧＡＭＥ

【Ｎコード】
Ｎ７０１４Ｋ

【作者名】
シュラ・アイン

【あらすじ】
地球の温暖化、環境の悪化が進む２０ｘｘ年。
材質の分からない不思議な紙に出会ってしまった１０人の人間。
これから始まる究極の“ＧＡＭＥ”をクリアすることはできるのか！？

ＢＥＧＩＮＮＩＮＧ　【始まり】（前書き）

まだまだ青い若輩者でありますが、
お読みいただき、感想をヨロシクお願いします！！

BEGINNING　【始まり】

目の前に広がるのは広い大地。
そう、ここが俺達の新たなる“地球”に成るのだ・・・。

がらがらと言う物音とともにまた今日が始まってしまった。
何もかわりばえのしない日常。
この中で俺木村大和（きむらやまと）は２７年もの期間を生きてきた。
まだまだ冬の寒さが残る２月２９日。
「何で今年はいつもより１日多いんだよ。はぁー寒ぃー」
そういってもこの寒さがなくなってくれるわけはなく、無駄な体温を消費してしまったと、
小さな損失を嘆きながら、プラットホームに入ってくる電車を見ていた。

朝早い電車の中で数人の女子高生が騒いでいる。
普段は気にも留めないのだが、自分にもこんなときがあったなとしみじみと思い出す。
暖かい車内で何もすることはなく、いつものように携帯を取り出しニュースを眺める。

『地球温暖化の影響により、南極の氷がほぼ消失』

最近は“地球温暖化”がひどくなっているらしい。
ニュース番組ではそのことばかりが取り上げられている。
この地球（ほし）はもう終わりだとか『地球脱出計画』なんていうのも騒が

れている。
専門家でないこの俺でもこの星はもうだめだと分かっている。
そんなことを考えているうちに電車は降りるはずの駅を出発していった。

次の駅ですぐさま反対方向の電車にすべりんだ。何とか出社時間には間に合はずだ。
電車を降ると、またあの寒波が全身を襲う。
（時間も危ないし、ちょっと走るか）
こういうときほど道程は遠く感じられる。
結局会社までスピードを緩めることなく走り続けた。
呼吸を整えながらエレベーターに乗り3階のボタンを押す。
「すみません！」
エレベーターの扉が完全に閉まる直前に開いた。
（時間に間に合わなくなるじゃないか、んんっ？）
「すいません、あっ、大和先輩おはようございますっ！！」
目の前に立っていたのは同じ大学で後輩だった竹下恵美（たけしたえみ）だった。
この寒い季節に薄手の服装。
（何を考えてるんだこいつは）
「大和先輩いつも早いのにどうしたんですか？」
「あぁ、電車の中が暖かいからつい寝過ごしちゃって」
「すごく寒いですもんねぇ」
（そう感じてるのにその服装か）
恵美は3つ下の後輩で同じゼミに所属していた。
容姿端麗だかけっこう天然な彼女はゼミの内外を問わず、かなり人気があった。
あまり話したことはなかったのだが、何故か彼女は俺のことを覚えていた。

ピンポーン

エレベーターのドアが開きいつもの研究室が見えた。
「よっ、お二人さん。そろって出社とは仲がいいね」
こういういやみを言うやつはほかにはいない。
大蓮源太郎（おおはすげんたろう）だ。
１９０センチ近くもある、元ラガーマンだ。
こいつとは年が近い。そのためか結構食事にも行っている。
入社直後の竹下に告白し、振られたという噂も耳にしている。
「お前が重役出勤とはめずらしいな」
「寝過ごしたんだよ、わりぃかよ」
「わかった、わかった。そういうことにしとくよ」
ニヤニヤとしながら大蓮はそういった。
「そんなことより、例の資料はどうなってる？」
「あぁ、そのことか」
大和と源太郎は考古学に興味があり、大学では専攻しなかったものの、
趣味としていろいろとやっている。
源太郎と並んで歩きながら話し始めた。
「最近手に入った資料があるんだ」
大和は恵美に向かって言った。
「なんですかそれ？」
恵美が不思議そうに尋ねる。
「おい、大和。ほかの人間に喋って大丈夫かよ」
「大丈夫、大丈夫！」
「ダイジョウブ、ダイジョウブ！」
恵美が大和の口調を真似するように連呼する。
二人の反応を無視して源太郎は続けた。
「で、この資料のことなんだが・・・」
源太郎は白い紙の束を広げた。

「これは、コピーしたものなんだが、この表を見てくれ」
そこには生物の名前がびっしりと書かれていた。
「このグラフがどうかしたんですか？」
恵美がとぼけたように言った。
それもそのはずだった。
この資料は大和と源太郎が独自に探し出したものである。
二人もこの資料の意味を理解するのに一週間以上かかったのだ。
「ここには、地球上に存在したであろう生物の名前が書かれている」
それは大和も理解していた。
「で、それがどうかしたんですか？」
恵美が同じ質問を繰り返した。
すると源太郎の胸ポケットに入っている携帯電話が鳴り始めた。
「あぁ、わりぃ」
そう言い、源太郎は階段の方へ走っていった。
「どうしたんですかねぇ」
「どうせ、かみさんからだろう」
源太郎は結婚しており、４歳と６歳の子供がいる。
家に遊びに行ったことがあるの子供の顔は知っている。
（かわいそうなことに源太郎に似て顔が大きい）
そんなことを考えていると源太郎が戻ってきた。
「６歳のほうの息子が熱出したんで幼稚園を休ませるって」
上の子は今度小学校に上がると聞いている。
「で、こっち、こっち」
と、源太郎は大和に手渡していた資料を広げなおした。
「実は問題はこの表じゃなくて紙の材質なんだよ」
「材質？」
大和と恵美は声をそろえて叫んだ。
近くにいた社員達が一斉に振り向いた。
「でけぇ声出すなよ」
「あぁ、わりぃ。で、材質の何が問題なんだよ？」

「紙じゃないかもしれないんだ」
「紙じゃないって？」
「この紙の主成分はセルロースじゃないらしいいんだよ」
紙がセルロースでできていることはセンターで生物を取ったから知っている。
（文系でも常識で知っていると思うが・・・・・）
「じゃあ、何かを薄く切ったものじゃないのか？」
「いや、まだ調べてもらっている途中なんだが・・・・・」
立ち止まって、源太郎は言葉を濁した。
少し、沈黙が流れる。
「どうしたの？」
こらえきれずに恵美が尋ねた。
「地球上の物じゃないかもしれないんだ」
源太郎は小さな声でそう言った。
そんなばかな。

いつものデスクワークを淡々とこなし、午後六時に会社を出た。
いつも通りの生活。
しかし、頭の中ではいつもとは違ったことを考えていた。
源太郎の言った言葉がどうしても頭から離れない。

『地球上の物じゃないかもしれないんだ』

本当にそうであればすごい発見なのだろう。
“人類”の歴史に残る大発見かもしれない。
そんなことを考えているうちに駅に着いた。
定期を通そうとしたとき、後ろから誰かに名前を呼ばれたような気がした・・・。

目が覚めると大和は冷たい床の上に横たわっていた。
めまいがする。
ゆっくりと立ち上がる。
何も見えない。
ただ闇が広がっている。
（誰かに連れ去られたのだろうか？）
そんなふうに考えていると、そばに誰かの気配を感じた。
「誰かいるんですか？」
「大和？大和なのか！！」
「その声は源太郎か？」
あわてて駆け寄ると、そこには大柄な体格のいい男が立っていた。
「大和、ここはどこなんだ？」
「ごめん。俺にもわからないんだ。」
「そうか・・・・・。」
落胆したような声とともに大きなため息が聞こえた。
すると、近くから女の声がした。
あの声は、・・・恵美だ！
「恵美？恵美なのか？」
「えっ？大和先輩？」
「俺もいるぜ！」
「大蓮さんまで？」
恵美が近寄ってくる。
暗いせいであまり分からないが、たぶん恵美だろう。
「ここ、どこなんですかねぇ？」
いつもの口調で恵美が尋ねる。
「俺達もわからないんだよ」
「そうなんですか・・・」

しばらくの時間が過ぎた。
いや、どれぐらいかは分からない。
暗闇にいるせいで、だんだん感覚が失われていくようだ。

突然、全体が明るくなった。
三人とも目の前に手を広げゆっくりとおろした。
高いドーム状の天井。タイルの床。
明かりになれた大和の目にひとつの扉が目に入った。
「行こう」
大和はそう言い、扉に向かって歩き出した。
そして扉の前に立ち、扉を開けようとした。
しかし、ノブがない。
「どうやってあけるんだ？」
「引いてみたらどうですか？」
「だから、引くためのノブがないじゃないか！」
「そうか」
こんな馬鹿げた会話にあきれたのか、源太郎がため息をつきながら、
「普通こういう扉は押すんじゃないのか？」
そういって源太郎が触れた扉は期待を裏切るように自動で右へスライドした。

扉が開き、三人は新たなる部屋に踏み込んだ。
また同じようなドーム状の部屋。さっきより少しだけ広く感じられる。
そこには大きなモニターと、さっき三人がくぐったのと同じ扉が４つ。
その部屋の壁には、古代の文字なのだろうか見たことの無い文字が

びっしりと並んでいる。
あたりを見回していると、急にモニターの画面が光り、一人の人間が映し出された。
その人間の前には大きな布が掛けられており、表情を見ることはできない。
シルエットからして、男だろう。
そんなことを考えていると左手の二つの扉が同時に開いた。
一つ目の扉から出てきたのは、大柄の男と背の低い女性。
男のほうはかなり大柄で、源太郎と同じぐらいだ。
もう一人の女性は少しぽっちゃりとしていて、髪は短めだ。
二人とも肌の色が白いので、アメリカかヨーロッパ系の人だろう。
「ドゥユゥノゥ、ウェア・・・・・」
発音的にあまり得意ではなさそうだが、源太郎が話し始める。
「・・・・・・・・・・」
私達が彼らを連れ去ったと思っているのだろうか、二人とも小さな声で話し合っている。
すると、もうひとつの扉から出てきた背の高い女性が甲高い声で叫んだ。
「Ｌｅｔ　ｍｅ　ｇｏ　ｈｏｍｅ　！！（私を家に帰して！！）」
話し合っていた二人も静かになり、五人が一斉に彼女の方を見た。
彼女も肌の色が白く、髪は腰ぐらいまである。
細身で、顔つきは女優のように綺麗であり、大和は少し見とれてしまった。
そうしているうちに、またひとつの扉が開いた。
部屋に入ってきたのは１７０センチ弱ぐらいの黒人女性だった。
眼鏡を掛けており、知的な感じがする。
「あなたたちここはどこなの？」
日本語と英語、両方でそう言ったのだろう。
英語が苦手な大和にもまるで日本語のように聞こえた。
すると、突然モニターの男が話し始めた。

「ここでは言語の違いは関係ありません。どうぞ得意な言語でお話ください」
そう言い、男はまた黙った。
「あなたが私をさらったのね！目的は何？私の体？」
甲高い声で背の高い女が叫ぶ。
少しの沈黙があり恵美が話し始める。
「あのぉー、自己紹介してもらってもいいですか？」
それもそうだ。
名前の知らない色々な国籍の人が同じ部屋にいる。
皆不安で仕方がなかったのだろう。
「私の名前は竹下恵美。日本で会社員をしていたの」
「俺の名前は木村大和。恵美とは同じ会社で働いていた」
「俺の名前は大蓮源太郎。こいつらと同じ会社の社員だ」
三人が言い終わると、体格のいい男が話し始める。
「俺の名前は、ジェームズ・フラムだ。アメリカの工事会社で働いていた」
安心したように、隣にいた女性が話し始める。
「私の名前は、ルーシー・フェイ。この人とは大学が同じだったの」
次に甲高い声が聞こえてくる。
「あたしはキャシー・パーソン。イタリアで雑誌のモデルをやっていたの」
「私はナンシー・バーグ。アメリカで歴史の教師をやっていたわ」
黒人女性が話し終えると、モニターの男が再び話し始めた。
「ここに集まってもらった１０人にはある共通点がある。」
（共通点？）
「１０人？７人しかいないじゃないの！」
甲高い声でキャシーが叫ぶ。
こちからかの声は聞こえていないのだろうか、男は続けて話す。
「その共通点とは、“紙”だ」
（あの紙か！）

「あの紙がどうかしたんですか？」
落ち着いた口調でナンシーが問いかける。
やはり、聞こえていないのか、質問を無視して男は続ける。
「あの紙は、３７ｔｈ／ＧＡＭＥの“ＲＥＣＯＲＤＥＲ（記録者）”の所持品だ」
「“ＲＥＣＯＲＤＥＲ”って？」
おっとりした口調でルーシーが尋ねる。
「“ＲＥＣＯＲＤＥＲ”とは記録する者。“地球”の歴史の記録者だ」
「聞こえてるじゃないの！私の質問に答えなさいよ！！」
「これから君達にあるゲームをしてもらう」
「明日から大切な工事があるんだ！ゲームなんてしてられない」
ジェームズが叫ぶ。
その言葉には取り合わず男は単調な口調で続けた。
「ＭＡＫＩＮＧ　ＷＯＲＬＤＳ（世界創造）。通称“ＧＯＤ　ＧＡＭＥ”だ」
男はそう言い、画面から姿を消した。

AWAKENING　【目覚め】（前書き）

GOD　GAMEの参加者となってしまった七人と
彼らに待ち受ける試練とは。

AWAKENING　【目覚め】

男がモニターから消えた後、しばらくの沈黙が続いた。
沈黙を壊すようにまた一つの扉が開いた。
中から出てきたのは、若い男。
肌は白く、やはり欧米人であろう。
顔、雰囲気から察するに、気が強そうだ。
しかし、彼の顔にも戸惑いの色が浮かんでいる。
「ここはどこなんだよ！」
彼がそう叫んだが、誰も答えることはできない。
「あんたは誰なのよ！」
キャシーがやはり甲高い声で尋ねる。
「俺は、ダン・ウィル」
「他には？」
優しそうな口調でルーシーが言った。
「アメリカの大学に通って・・・・・」
ダンが俯く。
何か話したくないことがあるようだ。
一応もう一通り自己紹介をする。
またしばらくの沈黙。
ドアの開く音。
残っていた最後のドアが開き、二人の男女が部屋に入ってきた。
「あなた達は？」
中国人風の女性が言う。
「俺達は」
そう言うや否や、モニターに再び男が映る。
「これで１０人全員がそろった。ゲームスタートだ。」
男がそう言う。
そこからの記憶は残っていない。

誰かが体を揺すっている。
暑い。
地面がまるでフライパンのように熱い。
飛び起きると、足元には広大な砂漠が広がっていた。
周りを見回すと他の９人も目に入った。
「ここはどこなんだ？」
「分からない」
恵美が不安そうに答える。
「ここは、・・・・・」
あの男の声だ。
しかし、声が遠く感じる。
「おい、あっちに建物があるぞ」
そう源太郎が言うと、１０人は一斉に走り始めた。
ここがどこかなんて今はどうでもいい。
とりあえず、人を見つけることが先決だ。
「なんだ、これは・・・・・」
ジェームズが叫ぶ。
そこには金属でできているようなドーム上の建物があった。
１０人の目の前に一つの扉がある。
周りを回ってみたが、入り口はひとつしかない。
この中に人が住んでいるのだろうか。
大和はそっと扉に触れてみた。
その扉はまるであの扉のようにスッと右へスライドした。
室中は電気が点いているのか明るい。
「お邪魔します」
そう言って、中を除いてみると、テーブルの上に１０冊の本とあの

大きなモニター。
恐る恐る１０人が家の中へ入ると、ウィンという音とともに扉が閉まる。
キャシーが叫び声をあげる。
テーブルに近づいて本を持ち上げる。

『ＧＯＤ　ＧＡＭＥ』

他の９人も本を持ち上げ表紙を眺める。
するとモニターの画面が光り、またあの男が現れた。
「みなさんようこそ。“ＧＯＤ　ＧＡＭＥ”スタート地点、“天球の間”へ。」
落ち着いて辺りを見回す。
初めは気が付かなかったのだが、天井には無数の星が輝いているように見える。
「ここではゲームの初期設定をしていただきます」
「で、あんたは誰なのよ」
「私は“ＧＯＤ　ＧＡＭＥ”３７ＧＡＭＥ目の“ＭＡＳＴＥＲ（管理者）”ゼウスです。」
“ＣＲＥＡＴＥＲ”？」
ルーシーが尋ねる。
「それについての説明もいたしますので、まず、そこにある本のＰ．１を開いてください」
１０人が本を開く。
そこには契約書と書いてある。
「ゲームに参加される方は、そこにサインをお願いします」
「ゲームに参加しなかったらどうなるの？」
ルーシーが尋ねる。
「どうにもなりません。ただこの世界で寿命で死ぬまで生きてもらうだけです」

一同が静まり返る。
「あたしはサインするわ！さっさとクリアして帰らせてもらうわ」
そう言うとキャシーは本のそばに置いてあったペンでサインをした。
続いて、他の９人も彼女に続くようにペンを走らせる。
「サインをし終わった方は、一度、本を閉じてください」
バタン。
全員が一斉に本を閉じる。
「それでは、次の説明をいたします。本のＰ．２を開いてください」
再び本を開くと、契約書のページは跡形もなく消えていた。
「このゲームではそれぞれに役割が与えられます」
そのページには他にも数種類の単語が書かれている。
残念ながら英語が苦手な大和にはさっぱり理解することができなかった。
「説明は以上だ」
そう言い男が画面から消えるのと同時に、
大和の視界が暗くなり耳には誰かが倒れる音が聞こえた。

目の前には青い星。緑の木々。広大な大地。
地球。
いや違う。
一つしかない大陸。
パンゲア。
“始まりの大陸”。
そう、“始まりの”・・・。

目が覚めると、大和は再び砂の上に横たわっていた。

ゆっくりと起き上がり辺りを眺めるが、一面、見渡す限りの砂。
左手の甲にうっすらと痛みを感じる。
「天秤（てんびん）？」
左手の甲には丸い円があり、その中に天秤が描かれている。
これもこのゲームに関係があるのだろうか？
恐る恐る、そのマークに触れてみる。
その瞬間、頭の中に恵美の声が響く。
「恵美？」
どこから聞こえてくるのかも分からない声に戸惑いながら、
どこへ、誰にともなく話しかける。
「大和先輩ですか？」
不安そうな声が聞こえる。
「うん。周りに誰もいないんだけど・・・・・」
「私もです」
どうしたらいいのかさっぱり分からない。
この広大な砂漠で人と出会える気がしない。
「大和先輩！」
後ろから声が聞こえた。
後ろを振り返ると、こちらに向かって走ってくる恵美の姿が見えた。
「孤独死するかと思いましたよ！」
息を整えながらさっきとは全然違った口調で言った。
「どうして俺のいる場所が分かったんだ？」
偶然なのだろうか。
「このマークに触れていたら、何となく先輩のいる“方向”が分かったんです」
そう言って恵美が差し出した左手には、女性の絵が描かれていた。
やはりこのマークはゲームに関係があるようだ。
「他の人の居場所は分からないのかい？」
「やってみる」
そう言って恵美はマークに触れる。

大和も“天秤”のマークに触れた。
しばらく時間が過ぎたが何も起こらない。
「だめみたいですね」
少しがっかりしたように恵美がつぶやく。
「あたりに誰かいるかもしれないから歩き回ってみよう」
「そうですね」
そう言って、二人はゆっくりと歩き始めた。

歩き始めてどれくらいの時間がたったのだろう。
時計が無いせいで何時間歩いたのかも分からない。
見渡す限り砂漠。他には何も見えない。
暑い。
でも、のどが全く渇かない。
なぜなのか分からないが、水がない今はとてもありがたい。
少し歩くと、地面に何かの“芽”が生えていた。
ほぼ等間隔に並んでいる“芽”は誰かが植えたようにしか見えない。
「君達は・・・・・」
後ろから声がする。
振り向くとそこに立っていたのは最後に入ってきた中国人風の男だった。
白い白衣を着ているところを見ると、研究者か何かのようだ。
「俺達もゲームの参加者なんだ」
「そうなんですか。あっ、自己紹介を忘れてましたね。私の名前は楊(やん)・留衣(りゅうい)。
中国の四川省の大学で研究員をやってました」
「俺達は日本の会社員だ」
「そうなんですか」
「で、この“芽”は？」

「あぁ、これのこと？」
楊が“芽”を指差す。
「これはね、僕が“考えた”んだよ」
考えた？
「考えたって？」
恵美が尋ねる。
「僕もよく分からないんだけど、風景があまりにも殺風景だったから、“木”があったらいいな、
でもどんな“木”だろう、こんな砂漠に生えるんだから、こういう性質で・・・。
って考えてたら、急に“芽”が生えてきたんだ」
「俺達にもできるのかな？」
砂の上に芽が生えてくるのをイメージする。
乾燥した気候に強い。
少し大きめの緑色の葉。
太い茎。
長い長い根が土を掘り進んでいく。
幾つものイメージを小さな箱に詰め込んでいく。
よし、だんだんイメージが固まってきた。
芽が生えた。
そこに。俺の目の前に。
しかし目を開けるとそこには何も変わらない景色があった。
「無理みたいだ」
「私もです」
「たぶんこの力は私にだけ与えられたものなのでしょう」
ということは、俺にも何か力がある。
それが何かは分からないけれど。
深く考えたからか、少し目眩がする。
深呼吸を繰り返すとだんだんと楽になってきた。
「とりあえず、もう少しあたりを歩いてみましょう」

大和が言い、三人は歩き始めた。

ＡＢＩＬＩＴＹ　【能力】（前書き）

楊の“植物を生やす能力”。
その他の参加者に与えられた能力とは・・・・・・？？

ＡＢＩＬＩＴＹ　【能力】

僅かに輝く星が三人を照らす。
あたりは闇と静寂に包まれ、
周りの二人以外の気配は感じられない。
暗くなるまではうだるような暑さだったのに、
今ではまるで冬のように寒く感じられる。
俺達はどうなるのだろう。
この広い世界で。
何もないこの大地で。
ふと思い出したように手の甲を触ってみる。
でこぼこした感触。
次の瞬間、大和の意識は途切れていた。

あの時から幾日が経ったのだろう。
一面、砂しか見られなかった大地には少しずつだが植物が生え始めていた。
まだ生まれたてのような葉を触りながら、大蓮源太郎は空を見上げていた。
「大和、どこに行っちまったんだよ・・・・・」
閑散とした空気の中で呟く。
「行くか」
左手の甲をさすりながら立ち上がる。
誰を待つわけでもないのに源太郎の足はストップしていた。
重い足取りのまま歩き始める。

歩け、歩けと急がせるように手を振りながら歩く。
その左手の甲には花瓶のようなマークがある。

源太郎が立ち去ってから約一時間後、
ゴロゴロという雷の音と共に、
源太郎が立っていたあたりに“恵みの雨”が降り注いだ。

「ルーシー、ルーシー」
できるだけあたりを気にしながら呼びかけた。
返事はない。
「どこに行っちまったんだ？」
ぼりぼりと頭をかきながらあたりを見回す。
「くそ」
なんだこれは。
ふとした拍子に持ち上げた左手に奇妙なマークが付いている。
子供か？
その子供はまるで円からはみ出さんばかりだ。
こんなバランスの悪いもの付けやがって。
見つけたらただじゃおかねぇ。
そう愚痴を垂れながらマークに触れる。
『ジェームズ、ジェームズ。どこなの』
頭の中にはっきりと聞こえる。
『ジェームズ・・・・・』
次第に声が小さくなっていく。
これは・・・・・。

ルーシーの声だ！！
『ルーシー、ルーシーなのか？』
『ジェームズ？ジェームズなの？』
頭の中の声が大きくなる。
『そうだよ』
優しく答える。
『あぁ、よかった・・・・・・』
安心したような口調。
『どこにいるんだい、ルーシー？』
『分からないわ』
それはそうだ。
この大地には特に目印となるものなどなかった。
あるのは地面に生えている植物だけだった。
どうすべきか。
そうだ。
『太陽はどちらに見える？』
『ええっと・・・・・。ちょうど私の前のほうにあるわ』
ジェームズは顔を上げ、太陽の位置を確認する。
ちょうど後ろだ。
『よし、そこで待っていてくれ』
『分かったわ。ジェーム・・・・・』
マークから手を離すとルーシーの声は途絶えた。

髪が乱れている。
小さい頃から自慢だった、綺麗な髪が。
たくさんの人にほめられた。

だから、手入れを絶やすことなどなかったのに。
「もう、嫌よ・・・・・」
キャシーはその場に座り込んでしまった。
もう動けない。
疲れた。

裕福な家庭でわがままに育った彼女は
「人生なんて楽しめばいいのよ」
「あんた達馬鹿ね。勉強してなんになるわけ？」
と周りの人に言い続けた。
そのせいであろう、しばらくすると彼女の周りに人がいなくなっていた。
私のレヴェルについて来れなくなったのよ。
愚鈍な民衆どもが。
寂しくはなかった。
小さい頃から一人には慣れていたから。

「なんで、昔のことなんか・・・・・」
あたりは閑散としており、何も見受けられない。
なんなのよここ。
早く家に帰らせなさいよ。
地面を蹴りつける。
「いったーい。この馬鹿！」
無意味に地面を踏みつける。
「はぁ、はぁ」
幾度となく踏みつけたが、むなしさがこみ上げてきたからやめた。
もともと、無駄なことは大っ嫌いなのだ。
ぽこっ。
「なによ」
ぽこ、ぽこ、ぽこっ。

「なんなのよ」
どこからともなく聞こえる、変な音。
ふと足元を見ると幾つもの小さな芽が出ていた。
「植物？どうして今？」
あたしの可憐な香りに誘われたのかしら・・・・・。
馬鹿じゃないの？
自分で言ったことを自分で否定する。
無駄の極(きわ)み。
「ありえない」
ふと下を見ると、植物の葉が大きくなっていた。
「ちょっと速くないかしら」
そう言っている間にも大きくなっているような気がする。
「それにしても退屈ね」
そうだわ。
「こんなみすぼらしい葉っぱには・・・・・」
青虫よ。

虫は嫌いだった。
一度料理の中の野菜についていたことがあった。
それがずっとトラウマになっていた。

そう、青虫。
どんなものかは分からないけれど。
えぇっと。
とりあえず細長いわよね。
で、少しだけ長い、５ｃｍぐらいかしら。
で、“青虫”って言うぐらいだからきっと真っ青なのよ。
あとは何かしら。
「詳しくは知らないのよねぇ」
気分が悪くなっていく。

青虫最悪。
完全なやつ当たりなのだが。
そうだ。ここは女の子らしくファンシーに。
羽よ、羽。
あんなに綺麗な蝶になるんだもの。
初めっから生えてたって問題ないわ。
金色の卵から生まれてくるのよ。
で、で、で・・・・・。
あぁ、めんどくさい。
今頃気付いた。
「馬鹿らしい」
キャシーは立ち上がって歩き始めた。

キャシーが歩き去ったしばらく後。
地面の葉っぱの上の小さな金色の卵から羽の生えた青虫が這い出した。

MEETING　【集合】

「大和先輩・・・・・」
恵美の呟くような声。
あの夜、あの時。
先輩が消えてしまった。
どうして？
わからないよ。
自問自答を何度も何度も繰り返す。
あまり知らない人と一緒にいるからかもしれない。
歩くのをやめ、前方を歩く背中を見つめる。
恵美が立ち止まったことに気が付いたのか、楊も立ち止まる。
「どうした？疲れたかい？」
「ううん。違うの・・・・・」
首を振りながら恵美が答える。
「そうか・・・・・」
そう言いながら楊が地面に座り込む。
恵美も同じように地面に座り込んだ。
あの夜からいったい幾時間、幾日歩いたのだろう。
足が痛い。
疲れた。
しかしそういったものは一休みでもすればすっとひいた。
のどの渇きや空腹その他の生理的症状を催すことはなかった。
どうしてだか分からないがこの状況下においてはひどくラッキーだった。
「どうしたんだい？考え事か？」
優しく問いかけてくる楊の目を見つめる。
悪い人じゃない・・・・・、と思う。
思うけど・・・・・。

不安だ。
生まれてこの方覚えている限りでは外で一人ぼっちになることなんてなかった。
こんなに長く。
正確に言えば一人ぼっちではないけれど。
「あの、大和と言ったか、はどこに言ってしまったんだろう」
髪の毛をガサガサと触りながら問いかける。
「わかりません」
俯き加減に小さな声で答える恵美。
「いや、君を責めているわけではないんだよ」
慌てて楊が言った。
それからしばらく沈黙が続いた。
恵美は俯きながら地面を見つめていた。
楊は他にすることがなかったのでひたすら芽を生やしていた。
やがて、その芽が二人のいる辺りを覆いつくした。
「そろそろ、行こうか。ここで立ち止まっていてもきっと彼は帰ってこないよ」
恵美の機嫌を伺うように服に付いた砂を払いながら楊が言う。
「そうですね」
落ち着いたのだろうか、少し明るい声で答えた。
二人は歩き始める。ゆっくりと。
歩き始めてしばらくたった頃、前を歩いていた楊が言った。
「グリム童話を知っているかい？」
唐突な問いに恵美が戸惑う。
「え、あっ、はい」
「ヘンゼルとグレーテルと言う話は？」
「はい、知っています」
楊が立ち止まる。
続いて恵美も立ち止まった。
「僕はずっと“パン”を落としてきたんだ」

パン？
そんなものを落としていたのか？
全く気が付かなかった。
楊のほうが前を歩いていたのに？
戸惑い、思考にふける恵美。
その姿を見かねたように、溜め息をつきながら楊が付け加える。
「後ろを見てごらん」
ふと振り向いた後ろにはグリーンの一本の絨毯がひかれていた。
全然気が付かなかった。
自分が歩いてきた覚えがなかった
まっすぐに伸びる“芽”の絨毯の上を。
「やっと気付いたかい？もっと前から知っていると思ってたけど」
少し恥ずかしそうに楊が頭を掻く。
「ごめんなさい。考え事をしていたものだから」
「いいんだ」
また前を向き歩き始める楊。
その足元を見ると、彼はまた地面に絨毯を編み始めた。
皆同じなんだよ。
この世界でどうしたらいいのか分からない。
自分のまわりのことだけを考えてちゃだめなんだ。
「待って」
そういいながら恵美は走り出した。

絨毯の上を行進する九人。
その間隔は遥かに離れている。
彼らの心理的な距離も。
しかし。
その間隔は徐々に。

徐々に狭(せば)まりつつある。
やがてその九人は一つの塊となるだろう。
やがて、やがて・・・・・。
一つの目標に向けて・・・・・。

冷たい床。
まただ。
この床は・・・・・。
「目が覚めたか」
どこからともなく声がする。
あの男の声だ。
モニターの、そして俺をこんな事態に巻き込んだ男の。
「おい、どこにいるんだ。顔を見せろ」
僅かな静寂。
咳払いが一つ。
「木村大和。君を呼んだ理由は他でもない」
焦らすように咳払いをもう一つ。
「君が今回のゲームのキーマンだからだ」
何を言っているんだ。
わけが分からない。
「そう他でもない。君の役割のことだよ」
いらつかせる声。
でもどこか懐かしいような。
そんなわけはない。
「役割って？」
必死に口調を落ち着けながら大和が尋ねる。

「木村大和。いや“リブラ（天秤座）”。君の役割は“ＤＲＩＦＴＥＲ（放浪者）”だ」
“ＤＲＩＦＴＥＲ”？
なんだ、それ？
「“ＤＲＩＦＴＥＲ”とは放浪者。つまり、“時代を放浪するもの”」
時代、を“放浪”？
「そうだ、“リブラ”。君はこのゲームを“裏側から”支配する」
裏側から？
「他の参加者の多くは人前に姿を見せることができない」
どうして？
どうして・・・・・。
今頃気が付いた。
俺は“声”を出していないはずなのに。
「気にするな。“ここ”では隠し事は通用しない」
そういうことじゃないだろう。
「では、続ける」
また咳払いが一つ。
それが俺の記憶を刺激する。
何かを思い出しそうなのに・・・・・。
むず痒い。
「どうしてか。それはだ・・・・・」
こうなったらこっちも向こうの考えを読んでやる。
やめたほうがいい。
本能が告げる。
うるせぇよ。
やめとけよ。
うっせぇよ。
『やめなさい』
なっ？

あの“声”は？
くそっ、思い出せない。
「少し間をおいたほうがいいな」
あぁ、俺も考えることがあるんだ。
扉のスライドすると言う音と共に男の気配が消える。
ふぅっ。
溜め息を吐きながらあたりを見回す。
遠くから光が届いている。
薄暗い光。
光源に少しずつ近づく大和。
光は窓からのもののようだった。
窓から外を眺める。
地の上からでは見えない景色。
すぐ近くには青と茶色の惑星(ほし)。
あれは俺がいた惑星(ほし)。
よく見ると細い、一本の糸のような緑の線。
あれは・・・・・？
ふっと無意識に笑みがこぼれる。
今は。今は別に考えることがあるんだった。
あの“声”はいつか聞いた、そういつか・・・・・。

立ち止まり再び左手のマークに触れる。
女性のマーク。
乙女座。
前々からそうじゃないかと思っていた。
楊のマークも見せてもらった。

彼のは山羊。
それを見てこのマークは“星座”だと確信した。
分かったところで、何も進展はないんだけれど。
「ねぇ、歩くのが速くないかしら？」
後ろから声がする。
「あぁ、ごめんなさい。ナンシー」
黒人の歴史教師。
彼女が最初に私達に“追いついた”。
後方から彼女の声がした時は飛び上がりそうになるほど嬉しかった。
とりあえず、“仲間”が増えるのは嬉しいことだ。
その後も次々と参加者達が追いついた。
集団は全部で九人になった。
・・・・・・・・・・・・。
一人足りないよ。
大和先輩・・・・・・。
「大丈夫だって、あいつなら・・・・・・」
そう言って励ましてくれる大蓮さんもどこかさびしそうだ。
マークに触れたまま意識を集中させる。
大和先輩・・・・・・。
どこに・・・・・・？
・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・上？
・・・・・・上なの？
そんなわけないよね。
「おい、置いてかれるぞ」
大蓮さんの声。
意識を集中しすぎて足が止まっていたようだ。
「待って」
恵美が走り出す。
その足元には。

足元にはきっと大和が歩いてくる、そういう願いの表われであるグリーンの絨毯が続いていた。

TIME 【時】

大和は外を眺めている。
背後で扉の開く音。
そして誰かが近づいてくるような気配。
「お前は、誰なんだ？」
気配が立ち止まった。
「思い出せないか？」
すぐ近くで声がした。
大和が後ろを振り向く。
暗い、真っ暗い闇があたりを覆いつくしている。
背後の窓もいつの間にか消えていた。
「どこかで会ったことがあるな」
頭をフル回転させながら大和が呟く。
しかし、思い出すことができない。
少し間を置き、気配が遠ざかる。
ギシッという軋む音共に男が話し始めた。
「まぁ、いつか思い出すだろう。今回言いたかったのは役割のことだけだ。では・・・・・」
どさっ。
男がそう言うと大和の意識は途切れた。

暑い。熱い。
と言うことは元の場所に戻ってきたということか。
地面には緑の“絨毯”がひかれていた。

よく見ると、あの植物のようだ。
ということは、楊の仕業に違いない。
大和がゆっくりと上体を起こす。
その動きに驚いたのだろうか、植物の間から何かが飛び上がった。
蝶か。
いや、“青虫”！！
なんで、青虫に羽が生えているんだ？
これもまた誰かの仕業なのだろうか。
青虫がさらに上空へと舞い上がる。
青虫はしばらくすると僅かな光の粉となり大和に降り注いだ。
何が起こったんだ？
大和には事態がさっぱりと呑み込めなかった。
そして再び視線を地面に戻した。
この“絨毯”はどこまで続いているのだろう。
真っ直ぐとは言えないがずっと、どこまでも伸びているように見える。
たぶんこれは目印か何かなのだろう。
「よし、行ってみるか」
大和はゆっくりと道の上を歩き始めた。

「おい、あいつはまだ来ないのかよ。てか、俺達は何をすればいいんだ？」
ダンがここにいるほぼ全員が思っているであろう疑問を口にした。
もちろん、誰も答えることはできない。
日照りが続く中、沈黙が集団に重くのしかかる。
いらいらしているのか、ダンが小さく地面を蹴り始めた。
「うるさい。今は静かにしてちょうだいよ」
その音に耐え切れなくなったのだろうかキャシーが叫んだ。

「おいおい、君はいらいらしないのかい？」
皮肉を込めてダンが返す。
「そういうあなたはママがいなくて不安なんじゃないの？
ママ、ママって叫ぶぐらいは許してあげるわよ、ボーヤ？」
ふん、と勝ち誇った表情でキャシーも返した。
「なんだよこの・・・・・」
言葉に詰まるダン。
さらにキャシーが追い討ちをかけようとする。
「二人とも落ち着いて」
見るに見かねたのかルーシーが止めに入る。
また沈黙が訪れ、それを断ち切るかのようにジェームズが尋ねた。
「確かそこのあなたは自己紹介がまだだったよね」
指差した先には最後に入ってきた中国人風の女性がいた。
「私は、あの・・・・・。ねぇ？」
何かへの同意を求めるかのように女は楊の顔を見た。
咳払いをして楊が話し始めた。
「えぇっと、この女性は私と同じ場所にいたのですが・・・・・」
楊も詳しくは知らないようだった。
仕方なく女が話す。
「私は林・仲胡（リン・チュウコ）。それ以上は言えないわ」
腕を組みながら上から目線で言い放った。

互いに知らないもの同士なので声がするのはジェームズとルーシーのものだけだった。
互いに顔を近づけながらなにやら話をしている。
周りを見回すと目を閉じている人がほとんどだった。
左手のマークに手を当てる。
大和先輩・・・・・。
どこにいるんですか？
・・・・・すぐ近く？

ふっと後ろを振り向くと、小さな人影が見えた。
ゆっくりと歩いてくる人影。
あれは・・・・・。
大和先輩だ！！
「大和先輩！！」
そう叫びながら恵美は大和に向け大きく手を振った。
遠くで大和も手を振り返す。
走り出す大和。
だんだんと人影が大きくなり大和が集団に合流した。
「すまないな」
「ほんとよ」
キャシーがぼそっと呟いた。
大和が合流してからしばらく時間が経った。
しかし、何も起こる気配がない。
「じゃあ・・・・・」
楊が言うや否やあの男の声がした。
そこら中に響き渡るような大きな声。
「時は来た。十人のプレイヤー達よ、新たなる世界を創造せよ」
男がそう言うとあたりは真っ暗になった。
いや、どこか違う場所に移動したのか。
背後に大きな惑星が回転している。
惑星は大きく見えるがそれとの遠近はつかめない。
そんな空間に男の声が響く。

木村大和
プレイヤー名：リブラ（天秤座）
ロール名：ＤＲＩＦＴＥＲ（放浪者）

竹下恵美

プレイヤー名：ヴィーゴ（乙女座）
ロール名：ＣＯＭＭＡＮＤＥＲ（指導者）

大蓮源太郎
プレイヤー名：アクエリアス（水瓶座）
ロール名：ＷＥＡＴＨＥＲＭＡＮ（気象士）

ルーシー・フェイ
プレイヤー名：ボルックス（双子座）
ロール名：ＲＥＣＯＲＤＥＲ（記録者）

ジェームズ・フラム
プレイヤー名：カストル（双子座）
ロール名：ＲＥＣＯＲＤＥＲ（記録者）

ナンシー・バーグ
プレイヤー名：アリエス（牡羊座）
ロール名：ＣＯＮＴＩＮＥＮＴＡＬ（大陸人）

キャシー・パーソン
プレイヤー名：カプリコーン（山羊座）
ロール名：ＣＲＥＡＴＥＲ（創造主）

ダン・ウィル
プレイヤー名：レオ（獅子座）
ロール名：ＥＭＰＥＲＯＲ（皇帝）

楊・留衣
プレイヤー名：タウロス（牡牛座）
ロール名：ＰＬＡＮＴＥＲ（植樹者）

林・仲胡
プレイヤー名：キャンサー（蟹座）
ロール名：ＡＤＶＩＳＥＲ（助言者）

「各プレイヤーの情報を確認。設定の異常なし」
かしこまった声でこう続けた。
「それではゲームをお楽しみください」
目の前が暗くなった。

TIME【時】（後書き）

プロローグ終了

第1話　進化の原点

目を開けるとそこは草原だった。
風にそよぐ草花。
上体を起こして周りを見渡すが何も見えない。
気持ちがいい、もう少し横になろう。
大和はもう一度草原に身体を横たえる。
再び目を瞑(つむ)る。
心地よい眠り。
どこまでも落ちていく、どこまでも・・・・・。

ゲーム開始から幾年が経ったのだろう。
この星では一年が一分に感じられることもある。
逆もまたしかりなのだが。
目覚めるとすぐに近くにおいてあった鞄の中から一冊の本を取り出した。
まるで、それが自分の義務であるように。
そして“タウロス”と書かれた表紙をめくった。
またそれは自分の名前であるかのように感じた。
その本で一式、自分達に課せられた役割を理解した。
よりレヴェルの高い“地球”を創造すること・・・・・。
・・・・・よく意味が分からないが。
とにかく名前以外の知識は全てあった。
ゲーム上においては全く問題がないだろう。
「さて、カプリコーン（キャシー）」

後ろを振り向きながら。
「なによ、タウロス（楊）」
しかめっ面をしながら顔を上げる。
その地面には無数の光る粉が降っていた。
「またやったのか？」
「いいじゃないの」
溜め息をつく。呆れた。
またやったのだろう。
彼女は生命とは何たるかを理解していないようだった。

私の役割は“ＰＬＡＮＴＥＲ”。
植物系の発展を担う大切な役割。
そして、彼女の役割は“ＣＲＥＡＴＥＲ”。
・・・・その他の発展を担う。

ゲームが始まりしばらくして気付いたことがある。
それは“急速な進化”をした生物を作り出すことはできない、ということ。
正確に言えば、そうやって生み出された生物は数分と持たなかった。
そのなれの果てがあの“光る粉”だった。
その光る粉はまるでその生物達がこの世に生まれてきたことを感謝しているかのように見えた。
たとえ、一瞬の命だとしても。
私達は選ばれし神なのである。
と、彼女に何度も言ったがそっぽを向いて聞かなかった。
まぁ、彼女を不機嫌にするのはあまり得策ではない。
なぜなら彼女の力がなければ“第一のミッション”はクリアできないのだから。

本を読み終わり、私は歩き出した。

どこへともなく、足の向くままに。
それは、私の意志だったのだろうか。
しばらく歩くとそこで彼女に出会った。
そのときだった。
頭の中に男の声が響いた。
『第一のミッションは“人類創造”だ』
と。

生物学者である自分から見ても人類をゼロから作り出すのは至難の業だった。
しかし、私達にはこの“力”がある。
私の創(つく)った植物と、彼女が創った羽の生えた青虫はすでに跡形もなく消え去っていた。
生命の創造は生物学の知識があった私にとってはとても簡単なことだった。
最初の生命はまず海中で生活していた。
そこで、彼女を連れ海を探した。
数時間歩くと目の前に壮大な海が現れた。
その海岸には男女一組が座り込んでいた。
「やぁ、君達か」
男が後ろを振り向いた。
「開始から三日後タウロス、カプリコーンと合流」
女の方がノートにペンを走らせる。
「さて、私達は仕事のほうにとりかかろうか」
少しだけ海の中に入りゆっくりと中を覗き込んだ。
何もいない。
それはそうだろう。
しかし次の瞬間足元を何かが通った。
顔を上げ急いで岸に向かって走る。
水に足をとられ上手く走れない。

やっとの思いで岸に辿り着いた。
息切れしている。
深呼吸して呼吸を整えていると後ろの海の方で何かが跳ねる音がした。
思わず笑みがこぼれる。
「ははっ、ビギナーズラックというわけか」
一匹だけのその“魚”は四人が見つめている間も海面から姿を見せ続けた。
甲冑をまとったような硬い鱗。
たぶん古生代に存在していた甲冑魚だろう。
タウロスは水の中に再び足を踏み入れた。
魚の動きが遅くなってきているような気がする。
タウロスは水の中を覗き込んだ。
「やっぱり。魚だけか」
少し微笑みながら目を瞑る。
『この海中に十センチ感覚に簡単な藻を』
やがて足元が揺れるような感じがし、足元に数十本ものもが姿を現した。
想像したとおりだ。
「どうしたの」
カプリコーンが叫ぶ。
タウロスはゆっくり岸に向かって歩きながら話し始めた。
「魚には酸素が必要だ。そうだろ」
カプリコーンに微笑みかけた。
甲冑魚がいるということは・・・・・。
「カプリコーン。三葉虫って知っているか」
「えぇ、それくらいは知っているわ」
「じゃあ、創ってくれないかな」
カプリコーンが目を閉じながら答える。
「わかったやってみる」

しばらくすると海中にいくつモノ影が見られるようになった。
その影はしばらく経っても消えることはなかった。
「どうして。現存した生物だからなの」
カプリコーンが素朴な疑問を口にした。
「それはあながち間違いじゃないよ」
「もったいぶらないで教えなさいよ」
ため息をつきながらタウロスは言った。
「結構専門的な知識になってしまうんだけれど、甲冑魚は古生代のオルドビス紀という時代に存在していたんだ。で、三葉虫もその時代に存在していたからもしかしたらと思ってね。後はオウムガイなんかもいたんだよ」
わけが分からないといった表情をしながらカプリコーンが海を眺める。
つまりこれが進化の原点なのだろう。
ここから“人間”まで進化させるのはかなり骨が折れそうだった。

第2話　時を駆ける

「さて、餌はどうしたものか」
タウロスは地面に座り込んだままつぶやいた。
甲冑魚、三葉虫は何とか生み出せたものの、それらの餌となる動物がいなければならない。
しかし、プランクトンを創造することは不可能に近かった。
まず第一にもしそうできたとしても肉眼で確認することができないだろう。
「餌のことなら困らないと思いますよ」
目の前に現れたのは先程から近くに座っていたボルックス（ルーシー）だった。
彼女は白いパーカーと青いジーンズを着ている。
「どういうことだ」
そうタウロスが言うとボルックスの後ろから現れたカストル（ジェームズ）はもっていた鞄の中からノートぐらいの大きさのテレビのようなものを取り出した。
「これを見てみな」
受け取ってみてみると驚くべきものが映し出されていた。
そこに映っていたのは深い深い海中だった。
そこにはたくさんの甲冑魚が泳いでいた。
底のほうにはゆっくりと蠢く三葉虫。
所々にオウムガイも見られる。
「これは・・・・・」
あの魚は一匹だけではなかったのだ。
元気がなくなっているように見えたのも浅瀬に来すぎたせいなのだろう。
そして続けてボルックスはタウロスに本を見せた。
タウロスの鞄の中に入っていたものと同じ大きさだった。

はじめはただの説明書きでしかなかったが途中から見覚えのあるグラフに変わった。
そこには生物の名前、その横に書かれているのは頭数なのだろうか。
見ているうちにも数字が消え、新たな数字が浮かび上がった。
「そういうふうに頭数の管理をしてくれているみたいなの」
ボルックスはタウロスから本を取り上げながら言った。
「さっきまでは名前の欄は真っ白だったのよ。あなたが来る前まではね」
そう言われれば、その名前も現代につけられた名前なのだ。
だから彼らに名前は存在しなかった。
つまり僕が彼らの名付け親というわけだ。
そう考えてから僕は後悔した。
「自分で考えればよかった」
呟いてみてももはや遅いことだった。
ボルックスは地面から茶色のジャンパーを持ち上げ羽織った。
轟音と共に砂埃が舞い上がる。
タウロスは思わず目を瞑った。
再び目を開けるとボルックスとカストルの姿はなかった
ただ彼の白衣が砂だらけになっていただけだった。

「この後、魚達の中には陸上で生活を始める者達が現れる」
「それぐらい常識よ」
カプリコーンは相変わらずの態度だった。
彼女の胸元の大きく開いた服でタウロスは目線のやり場に困っていた。
「このままでいけば、歴史はそのまま進む。ここで手を加える必要はないと思うんだ」
「じゃあ、お暇を頂けるって事かしら」

「ショッピングに行くつもりなのかい」
そんなものは存在しない。
カプリコーンはタウロスから少しはなれた所に座り込んだ。
やはり何もすることがないらしく地面に寝そべって空を眺めている。
今、暇はあるだけ無駄だった。
タウロスとカプリコーンの趣味は恐ろしくずれており会話は長く続かなかった。
退屈というよりむしろ居辛かった。
「はぁい、お二人さん。デートの途中だったかしら」
タウロスの目の前に現れたのはキャンサー（林・仲胡）だった。
「そんな風に見えるのかい」
「うーん。見間違いね」
「誰が見たってそうだろ」
「で、何してるの」
「何もしてないよ。いや、何もすることがないんだよ」
タウロスはため息をついた。
「じゃあ、本でも読んでいれば」
そう言ってキャンサーは持っていた鞄の中から一冊の本を取り出した。
それはタウロスのものともボルックスが持っていたものとも違う色だった。
黄色い表紙に黄金の文字。
少し読みづらい。
しかし、黄色は彼女の雰囲気にとても合っていた。
「あなたは本を持っていないの」
「持ってるよ」
そう言ってタウロスも本を取り出した。
「緑色・・・・・。地味ね」
彼女は思ったことをすぐ口に出すようだ。
ろくな生き方をしてこなかっただろう。

そういった人間は社会では疎まれる。
タウロスもわずかに不快感を覚え始めていた。
キャンサーは自分の本を開き、中身を声に出して読み始めた。
「えぇっと。何々、ゲーム中は他の二人以上の同意の下、あなたは時を動かすことが出来ます。何のことやら」
「ちょっと見せてもらってもいいかな」
確かにそう書いてあった。
つまり僕とカプリコーンが同意すれば時間を進めることが出来るということか。
「カプリコーン。ちょっと来てくれないか」
「何よ」
全身に付いた砂を払いながらカプリコーンが二人の元へ歩いてくる。
「私の本返して」
「あぁ。で、時間を進めてくれないかな」
「何のことかしら」
カプリコーンが不思議そうに尋ねた。
「この本に書いてあることかな。でも二人以上の賛成が必要って書いてあるよ」
キャンサーはよっぽど頭が悪いらしい。
「僕とカプリコーンで二人だ」
「何の話よ」
カプリコーンに事情を説明した。
「そんなの同意するに決まってるじゃない」
「じゃあ、えぇっとどれぐらい進めればいいのかな」
「２億５０００万年ぐらいかな」
「どれぐらいか全く見当が付かないよ」
三畳紀まで行けば僕らも本格的に動くことが出来るかもしれない。
「とにかく、２億５０００万年だ」
「分かったよ」
そう言ってキャンサーは目を瞑った。

「２億５０００万年、２億５０００万年・・・・・」
何度も聞いているうちに目の前が真っ暗になった。

第3話　恐竜

目が覚めるとそこは草原だった。
リブラ（大和）はゆっくりと上体を起こした。
向こうの方に大きな森が見えた。
しかし、それよりもリブラは驚くものを見つけた。
草を食む怪物らしきもの。
あれは・・・・・。
記憶の中の深い部分と結びついた。
すぐに起き上がり走り寄る。
それは図鑑の中でしか見たことのないもの。
現代には存在しなかったもの。
恐竜。
目の前の恐竜は後頭部から首の上まで伸びたフリルのようなものと
三本の角を持っている。
皮膚が硬質化して出来た鎧が全身を包み込んでいる。
所々に歴戦の傷跡が見える。
角の一つは歪んでおり、片方の目は閉じられている。
「そいつには触らない方がいい」
背後から声がした。
振り向くと薄汚れた白衣を着たタウロス（楊）が立っていた。
そう言うや否や、近くの一頭が咆えた。
後ろ足で立ち上がり、天に向かって咆え続ける。
やがてその恐竜は頭の先から光の粉となり天に向かって消えていった。
それを皮切りに他の数頭が大きな声で鳴きはじめた。
その泣き声の大きさのあまり大地が震えているような気がした。
その恐竜達は同じように天へ上っていった。
「やっぱり試作品(しさくひん)じゃだめか」

驚きのあまり腰が抜けてしまったリブラに向かってタウロスはそう言った。
不意に手をついている場所が僅かに窪んでいることに気が付いた。
そこには先ほどの恐竜がつけたのであろう足跡がついていた。
姿は消えても、痕跡は消えない。
俺たちが消えたとしても、この世界に俺たちが存在したという証は残るのだろうか。
枯れた大地に優しい風が吹いた。

「ここには」
そう言いながらタウロスは広い大地に向かって手を広げた。
「ここには、君の知っている恐竜はいない」
「どうして」
「どうしてかは分からない」
「ただ・・・・・」
どこから現れたのかカプリコーン（キャシー）が言った。
「ここにいるのは、確かに恐竜だってこと」
すると目の前を小さな恐竜が通り過ぎた。
脚が短く、まるでミニチュアダックスのようないでたち。
そして足元の草を食べ始めた。
「草食恐竜は草を食べやすいように脚が短く、そして。リブラ、蹴ってみて」
穏やかな生き物を蹴るのは気が引けたが、案外に強めに脚を振った。
「痛っ」
硬い。
まるでコンクリートの壁を蹴ったような感覚。
右足を抱えてリブラがうずくまる。
「敵から身を守るために硬くなっているんだ」
タウロスはそう言いながらしゃがんで恐竜の背中のあたりを撫でた。
気持ちよさそうに恐竜が小さく鳴いた。

その時、背後から叫び声がした。
慌てて恐竜が遠ざかっていく。
慌てているのは分かったが、その脚の短い、間抜けな走り方がひどく面白かった。
「タウロス。見て」
そう言って、ボルックス（ルーシー）は開いた本を差し出した。
その背後にはカストル（ジェームズ）、走ってくるキャンサー（林）の姿が見えた。
三人が本に目を落とす。
そこには表が描かれており、“ＣＲＥＡＴＵＲＥ”の欄の数字がまるでデジタル時計のように変化している。
「どうして、こんな急激に数が・・・・・」
軽く口を押さえながらタウロスが言った。
その時けたたましい音と共に誰かの鞄が鳴り始めた。
全員が慌てて自分の鞄を探る。
その音源はキャンサーの鞄だった。
小さな携帯電話のようなものを取り出した。
画面が異様に大きい。
「もしもし。誰ですか」
「誰でもいい。とりあえず助けてくれ」
男の大きな、慌てた声が聞こえた。
「誰ですか」
暢気な声で再び尋ねた。
「くっ。はぁ、はぁ。レオ（ダン）だ。アリエス（ナンシー）も一緒だ」
「ご用件は」
「そんなこと言って、る。はぁ、はぁ。岩の陰に・・・・・」
会話者の息が荒い。
何かから逃げているのか。
「はぁ、はぁ。追われている。よく分からない、毛がたくさん生え

た・・・・・」

そこで会話は途切れた。

第４話　捕食者

空から小さなものが降ってきた。
それは地面に衝突し、僅かな光を放った。
それは小さな毛が生えた生き物だった。
小さな生き物はその手の割に大きな体を引きずるように移動し始めた。
その後に小さな道が出来る。
やがて草原に辿り着くと、小さな生き物は草を食べ始めた。

「馬鹿みたいにでかいバケモノ・・・・・」
そう言ったときにレオはもう会話が続いていないことに気が付いた。
レオとアリエスが張り付いた岩が震えている。
彼らの近くには大きな生き物がいた。
毛がたくさん生え、大きな二本の手で体を引きずりながら移動している。
始めは簡単に逃げ切れると思った。
しかし、そのスピードが恐ろしく速かった。
立ちはだかる全ての木々をなぎ倒し、二人に猛然と迫ってきたそれは生き物と呼んでいいのかも分からないほど奇妙なものだった。
レオたちの三倍以上はあろうかという半球状の体にびっしりと生えた毛。
その毛の間から僅かに窺うことが出来る大きな黄色の目。
そしてその体に似合わないほどの毛の無い人のようなつるつるした手。
時折臭わせる特異な臭気が二人の恐怖を倍増した。
「何なんだ、あいつ。今まで見たことがねぇ」

荒野をさ迷っているうちに光に包まれ、周りが森になっていた。
そして、森林の中を歩いているときにこいつに出会った。
片方の手で体を固定しながら、片方の手で生き物を捕食していた。

やがて小さな生き物は人間ほどの高さの大きな生き物となり、草を食べるのをやめた。
もっと大きな餌を。
大きな空腹感を携えた大きな生き物は再び移動し始めた。
幾日経ったか。
彼の目の前に大きな草原が広がった。
そこには多種の生き物が生態系を作り出していた。
彼は猛スピードでそれらに飛びかかった。
小さく太い足が体の下に覗く。
そして生き物の数頭を踏み潰し、両手で生き物を捕らえようとした。
その瞬間、彼はバランスを崩し地面に倒れこんだ。
しかし、彼の手は獲物を放しはしなかった。
やっとのことで起き上がり、獲物を口に運ぶ。
彼の口は、やっとのことでそのうちの一頭が入るほどの大きさ。
己の体の不満に、彼は大きな声で咆えた。
餌の破片があたりに散らばった。
大地が震え、そこにいたたくさんの生き物たちは姿を消した。
そんなことは気にすることも無く、彼は再び食事を始める。
彼の手の中の生き物は、握りつぶされもはや原形を留めてはいなかった。
大きく開いた口に、全ての食べ物を放り込んだ。
骨の砕ける音と、肉を咀嚼する音が何もいない草原に響く。
全てを飲み込むと、彼は一息つくように軽く息を吐いた。
いくら食べても彼の空腹は満たされない。

その時彼は周りの餌がいなくなっていることに気が付いた。
「タベモノ、ホシイ」
軽い思考能力を持った彼は再び移動を始めた。
その遥か先には大きな森が広がっていた。

第5話　大地人

「エモノ、エモノ」
まるで人間のように言葉を話す化け物。
レオにはそれが幻聴としか思えなかった。
何かの鳴き声でしかないと思いたかった。
知能を備えた生き物ならばすぐに俺たちを見つけてしまう。
丸腰の二人には太刀打ちすることはできない。
「どうしたらいいの・・・・・」
困り果てた表情でアリエスは呟いた。
先程から同じ言葉しか出てこなかった。
もう限界だった。
草木が大きく揺れるのにも構わず、レオは走り出した。
「待って、よ」
アリエスも後に続く。
しばらくした後化け物は遠くに走り去る二人の姿を捉えた。
化け物が怒りからか、喜びからか大きな咆哮を上げる。
「ミツケタ、エモノ。エモノ」
何度もそう叫び、大きな手を振り回しながら移動し始めた。
木々をなぎ倒し文字通り森から飛び出した。
着地の瞬間、大地が震える。
その衝撃で思わず二人は膝をついた。
「なんだ。あれは・・・・・」
理解不能な行動を繰り返すあの生き物に改めて強い恐怖を抱いた。
そうしている間にもあいつは迫ってくる。
「立て」
すぐに立ち上がり二人は走り出した。
目の前にはただ広い草原が広がっている。
先程まで見られた生き物は一切いなかった。

あの気配を感じて立ち去ったのだろう。
一キロ近く離れているが、強烈な威圧感が二人の背中を刺している。
どんなに離れていたとしても、距離が縮まっていることは分かっていた。
このままでは追いつかれる。
「えぇっと、えぇっと・・・・・」
後ろから、風で紙が捲れる音とアリエスの声が聞こえる。
「何、してんだ。こんなときに」
「何か、載ってないかと思って。これ、マニュアルでしょ」
肩越しに覗くと、アリエスは本を広げていた。
途端に、レオは顔がにやけた。
馬鹿な女だ。
僅かにだが、早く走ることから意識が逸れ始めている。
ただ一緒にいるだけ。
情が移ったわけではない。
ここであいつが囮になればおそらく俺は逃げられる。
口に出すのは躊躇われるが、そうなってくれれば儲けものだ。
不意に背後からアリエスの気配が消えた。
構わずに走り続ける。
ついに限界か。
息が続く限り、俺は走り続けてやる。
レオは振り向くことなく、一人で走り去った。

ついに見つけた。
アタシの力。
勢いよく本を閉じる。
すぐに目の前に化け物が迫ってきた。
地面が震え、それに伴って体が震えた。
恐怖からではなかった。
どちらかといえば武者震い。

目の前で止まった奇妙な生き物。
大きく吐いた息がアリエスの髪を靡いた。
唾液が混じっていたが、目を逸らすことはしなかった。
そしてゆっくりと目を閉じた。
「ドン」
頭で膨らませたイメージを一気に爆発させた。
大地が震え始めた。
アリエスは立っているのがやっとだった。
地面が割れ、化け物の姿が消えた。
鳴き声が遥か下に消えていった。
穴を覗くとただ闇が広がっていた。
安堵の息を吐きながらアリエスは地面に座りこんだ。

地面に大きな穴が開き、その淵に女が座りこんでいる。
六人が走り寄ると女はこちらに顔を向けた。
「アリエスよ」
そう言ってリブラに向かって右手を差し出した。
手を握り引き上げる。
全身が何かどろどろしたもので汚れている。
「一人、なのか」
恐る恐るリブラが尋ねた。
さっきからレオの姿が見えない。
もしかすると玲の化け物とやらに食べられたのかもしれない。
「逃げたわ、一人で。向こうの方に走っていった」
そう言いながらアリエスは遥か向こうを指差した。
「化け物、は」
ゆっくりとタウロスが尋ねた。
「あの中よ、学者先生」
近寄って見ると遥かに深く、下は真っ暗で何も見えない。
深淵という言葉がぴったりだった。

「毛むくじゃらで、本当、化け物だったわ」
腰に手を当てながら、アリエスは自慢するように言った。
「一度見ておきたかったね」
案外冗談でもなさそうにタウロスが言った。
「私はごめんだわ」
ボルックスが僅かに体を震わせながら言った。
その肩を優しくカストルが包み込んだ。
その会話から外れて、キャンサーが深淵を覗き込んでいる。
「ねぇ、あれのことかな」
キャンサーがそう言うと同時に、淵を大きな手が掴んだ。

第6話　動き出した時間

段々と怪物の姿があらわになってきた。
二本の手を器用に使いながら大きな体を穴から引きずり上げている。
軽く地面が震え、化け物が地上に降り立った。
大きく息を吐き、全身の毛を荒立てている。
「エモノ、イッパイ。エモノォー」
大きく口を開き叫んだ。
その瞬間、七人は走り出した。
化け物がその後を追いかける。
アリエスが地面を引き裂く。
化け物は学習したのか、地面が震え始めると大きな体で空中に飛び上がった。
カプリコーンがさまざまな餌を創り出したが、目もくれなかった。
タウロスが創り出した大木も妨げにはならない。
僅かに間隔が開いただけ。
「どうしたら、いいんだ」
三人も限界のようで、しばらくの間能力を使っていない。
「もう。だめ」
ボルックスが足を止めてしまった。
「ボルックス」
カストルが慌てて駆け寄る。
迫り来る怪物。
怪物が大きな口を開いた。
涎が地面を濡らす。
怪物が二人めがけて跳躍した。
もう、だめだ。
リブラが目をつむった、その時。
ドン。

「ここまで大きくなったか」
知らない声だった。
目を開けると大きな檻が怪物を覆っていた。
声の主がその後ろから現れる。
二十歳ぐらいの青い作業着を着た青年。
頭には白いキャップ型の帽子。
「すみませんね。落とすのが早かったみたいで」
表情一つ変えずにそう言い放った。
「武器の配布もまだみたいで」
この男の言っていることがさっぱり理解できなかった。
この生き物はこいつが連れてきたものなのか。
あっさりとこの怪物を捕らえた男は耳に手を当てながらなにやら一人でつぶやいている。
「おい」
リブラがそう言うと、思い出したように男がこちらを見た。
表情は一切変わらない。
「この生き物は、イーターという生き物なんだけど。俺たちが作り出した知能を持った動物」
その言葉に反応したかのように化け物が暴れ始めた。
大きな手で檻を握り力いっぱい揺すろうとする。
しかし、見た目が軽そうな銀色の檻はびくともしなかった。
「レベル1のイーターにてこずるなんてね」
僅かに口元が緩んだように見えた。
レベルがあるということはこれ以上にひどいものも・・・・・。
そんなことを考えているうちにイーターの入った檻が光の粉に変わり始めていた。
「時間か。がんばってね」
イーターと檻が消えた後、男もすぐに消え始めた。
「俺はカルラ。また会うことがあるかもしれないな」
全ての光の粉が天へ昇っていった。

すると。
大地から大量の芽が生えてきた。
それはものすごいスピードで大きくなり、リブラの背を遥かに越える大木となった。
地面から水が湧き出し、やがて小さな湖のようになった。
少しだけ暑くなり、息苦しくなったように感じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7014k/

GOD GAME

2011年3月4日15時50分発行